
ゴーストリー

マ王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストリー

【Nコード】

N4880P

【作者名】

マ王

【あらすじ】

俺は霊なんて信じていなかった。そう、あの日までは……。

あの日はとにかく暑い日だった。その暑さの中、突然路地に消えた幼馴染みを、殊勝にもチンピラから守ろうとした俺だったが、それが不幸の始まりだ。

そもそも、チンピラなんていなかったんだ。そこにいたのは、今まで存在を否定し続けてきたアレだった。

そいつにどうにかされた俺は、信じたくもないがアレの仲間入りをしてしまったみたいだ。

元に戻るにはアレをどうにかするしかないらしいが、俺には成す術もない。俺は一体どうすればいいんだ！？

（前書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回のこの作品、タイトルどおり幽霊の話ではありますがホラーではありません。ならどのジャンルに分類されるのかと聞かれると自分でもよく分からないので、とりあえずファンタジーにしておきます（おい

それと、あらかじめ言っておきます。今回は短編小説となっておりますが、ストーリーの全体像から言ったら、ほんのプロローグ程度のもんです。

それでもよろしければ、このまま読み進めていただければ幸いです。

諸君は、「幽霊」の存在を信じているだろうか。

夏真つ盛りの今、テレビでは心霊特集が連日放送され、世のバカ者……いや、若者たちにとって、お化け屋敷や心霊スポットは「遊び場」の一つである。

このように、「エンターテインメント」のツールと化している「幽霊」の存在。

近年急速に発展している「オタク市場」による経済効果と同じく、「心霊市場」による経済効果も無視出来ないレベルであると言える。

だが、その市場に全く貢献していない人間もいる。それが、俺だ。幽霊や妖怪、その他の非科学的な物は全く信じていない。信じていなくても、「怖いもの見たさ」と言う人間の本質通り、多少の興味を持つのが普通なのかもしれないが、俺にはそんな感情すら存在しない。

……はずだった。そう、あの日までは……。

それは、ある七月の暑い日のことだ。

俺は、幼馴染みの新條麗華しんじょうれいかと街で買い物をしていた。

それは「デート」などと言う甘酸っぱい代物ではなく、「荷物持ち」と言う名のただ苦いだけのイベントだ。

もはや、週末の恒例行事となったこのイベントに、その日の暑さも相まって多少の憂鬱感を引っ提げながら歩く俺の口からは、自然と溜息が漏れるわけで、

「いい若者が、なに溜息なんか吐いてんのよ」

俺の前をズカズカと歩くこの女は気に入らないらしく、すかさず文句を言ってくる。

そして、立ち止まって振り向き、これまた恒例となった言葉を満面の笑みと共に放った。

「こんな美少女と一緒にいるんだから、もっと幸せそうにきなさい」これが麗華の決めゼリフだ。

確かに、振り向かれたら大半の男がときめいてしまいそうな美少女であることは俺も認める。

そんな美少女が、頭一つ低い位置からでかい目をキラキラさせて上目遣いで迫って来るのだから、はたから見たら俺は幸せ者に見えるのだろう。

だがそれは、こいつの本質を知らない奴らの視点で見た場合に限られる。

その本質を嫌と言うほど知っている俺に、こいつに対する恋愛感情など芽生えるはずもないし、校内でも浮いた話は聞いたことがない。

それは「高嶺の花」としてではなく、「変人」として近寄り難いことに起因する。

そう言う意味では、麗華は校内一の有名人と言えるだろう。

そして、そんな有名人に付いた二つ名が「幽霊女」だ。

一見、「影が薄い女」と言う意味にも思えるが、そうではない。

有り体に言えば、麗華には幽霊が見える、らしいのだ。

この時点で幽霊否定派の俺には理解出来ないのだが、その程度で変人扱いされるのなら、「心霊市場」はこれほどまでに発展しなかっただろう。

麗華を変人たらしめているのは「見える」ことではなく、それに付随する奇怪な言動なのである。

それを羅列していると日が暮れてしまいそうなのでやめておくが、幽霊が関わると見境がなくなることこそが、麗華の本質であると言

えるだろう。

現に今も、普通の女子高生なら目もくれないような路地にまっしぐら……、

「つて、おい！ どこ行くんだった!?」

慌てて止めようとするが時既に遅く、麗華は長い黒髪をなびかせながら路地の奥に消えていった。

仕方なく追いかけると程なく麗華を発見したが、何故か途中で立ち止まっている。その視線の先には何も無い……はずなのだが、何かの気配を感じる。

外はあんなに暑かったのに、この空間だけ別世界のように涼しい。いや、寒気がすると言った方がいいか。

さっきまで問答無用で流れ出ていた汗は一瞬で引き、今は脂汗が滲んできている。

そんな空気の中で、麗華はある一点を見据えていた。今までの経験上、これは「何かが見えている」状態だ。

だが、当然俺には何も見えないし、人ならざるものがそこに存在しているなどとは夢にも思わない。だから、俺に出来ることと言えば、その気配を路地の奥にでも隠れているチンピラか何かのせいにして、麗華の盾になることくらいだ。

そう結論付け、狭い路地を進んで麗華の前に立とうとしたその時だった。

「来ちゃダメ!」

「え?」

何で? と聞こうとしたところで、まるで脳を直接揺さぶられたような強いめまいに襲われた。

その先はよく覚えていないが、恐らく気絶したのだろう。

俺は、麗華が「幽霊女」と呼ばれるきっかけとなった事件の夢を見ていた。

それは、とある授業中のこと。板書された問題の答えを聞かれた麗華は、その教師に向かって答えの代わりにとんでもないことを言ったのだ。

『先生の隣にいる男子が答えたそうなのでパスします』

この言葉に、それまで私語が絶えなかった教室内が静まり返る。当然、教師の隣に男子生徒などおらず、この時は麗華のジョークと言うことで話は終わった。

だが、当の本人はジョークを言ったつもりはなかったのだろう。それから数日間、麗華は同じようなことを言い続けていた。そればかりか、その架空の男子生徒に話しかけ始める始末。

さすがに堪忍袋の緒が切れたらしい教師が怒鳴りつけると、それまで無表情だった麗華は柔らかな笑顔を見せ、

『大丈夫です。成仏しました』

と、意味不明なことを呟いたのだ。

その噂は瞬く間に学校中に広まり、この頃から麗華は「幽霊女」と呼ばれるようになる。

俺自身は、それよりずっと前から「幽霊が見える」らしいことは知っていたのだが、これほどの奇行を目撃したのはこの時が初めてだった。

この日を境に、麗華の奇行はエスカレートしていく。その一番の被害者は間違いなく俺だろう。

そう、俺。俺……俺？俺って誰だっけ……？ダメだ……記憶がごちゃごちゃだ。

「諒……お願いだから目を覚まして……」
そうだ、俺の名前は「齋木諒」だ。

誰かがその名を呼んでいる。消え入るようなその声に、思わず目を開いた俺は、ありえないものを目にした。

俺の目の前に「俺」がいるのだ。そいつはまるで死んでいるかのように目を閉じ、頭から足の先に至るまで硬直したように微動だにしない。

そもそも、この奇妙な違和感は何だ……？ まるで宙に浮いているような、そんな感覚だ。

その原因を確かめるべく辺りを見回すと、ここが病室であることが分かった。

そこまでは理解の及ぶ範疇だ。問題はその先。

俺は、死んだようにベッドに横たわっている「俺」と正対する位置に浮いていたのだ。

この光景から導き出される答えは一つ。つまり、幽体離脱だ。

と言うことは、これは夢。そう、きつと夢だ。麗華の過去の夢から、この夢に飛ばされたに違いない。

そう断定した俺は、心を落ち着かせてから改めて辺りを見回した。この病室にいるのは俺の他にもう一人。ベッドの横で椅子に座って俯いている麗華の姿が見える。

その表情はこの位置からでは確認出来ないが、床に涙が零れ落ちるのは見逃さなかった。一応、幼馴染みに俺の心配をしてくれているのだろう。

麗華の涙を見るのはこれで三度目だ。夢の中だから回数には入らないのかもしれないが、こいつの悲しむ姿は見るに忍びない。

この状況から脱するには夢から覚めるのが一番手っ取り早いのだろうが、その方法が分かるはずもなく、俺はもう一つの方法を取ることにした。

魂となった俺が肉体に戻れば、きつと意識が戻るはずだ。

幽体離脱などと言うものに興味はないが、もしもの時の為にと麗華が教えてくれた知識が役に立ちそうだ。

興味がないのにすっかり覚えていることが自分でも不思議でなら

ないが、それほどまでに単純明快な知識であることは間違いない。

簡単に言えば、自分の体に接触すれば元に戻る、と言うものだ。それこそ、俺が知らなかっただけで、幽体離脱のことを少しでも知っていれば誰でも思い付きそうな、簡単な解決策だ。

そもそも今は夢の中なわけだし、これで元に戻れると確信した俺は、迷わず自分の肉体に体当たりを試みた。

とりあえず目先の問題は解決したのも同然。

そのはずだったのだが、勢いよく降下した俺は、まるで肉体に拒絶されるかのように弾き飛ばされた。

靈感があるらしい麗華は、その衝撃に気付いたようで、

「何……！？」

と、椅子が倒れるほどの勢いで立ち上がった。

そして、弾き飛ばされた俺はどんな動きをしたのか、ベッドと麗華の間で腰を屈めるようにして立っている。

当然、地に足が着いている感覚はなく、ちょうど床に接触した状態で浮いているだけなのだが……その体勢は、勢いよく立ったことによつて爪先立ちで前のめりになっている麗華の体勢と相まって、はたから見たらキスしているように見えることだろう。

実際、ちょうど唇が触れ合うような位置で固定されてしまっているのだが、これまた当然のように、その感触も温もりも感じられない。

だが、麗華は俺とキスしてしまつたと勘違いしたようで、慌てて手を伸ばして引き離しに掛かった。その手もやはり空振りし、バランスを崩してベッドに倒れこむ。

そのベッドの上には相変わらず俺の体があるわけで、その上にもかかわらずかかってしまった麗華は慌てて飛び起きた。

コントのような一連の動作に、思わず笑つてしまうと、

「誰！？」

「あれ？俺の声が聞こえるのか？」

「え……諒？こつちも諒……？どうなってるの！？」

「まあ、落ち着けつて。お前が前に言つてた『幽体離脱』ってやつじゃないのか？」

「ゆうつたい、りだつ……？　そうよ、それよ！　おかしいと思つたのよ。諒つてば全然目を覚まさないし……って、ちよつと待って！　あんた、いつからいたのよ！？」

「え？　えーと……お前が立ち上がった辺りから、かな」
「そ、そう。ならいいんだけど……」

この反応からして、泣いているところを見られたと思つたのだらう。こいつの性格からして、涙は見せたくないだらうし。とりあえず、見なかったことにしておいてやろう。

そんな俺の優しい嘘をまんまと信じた麗華は、急に強気になつてこつ言つた。

「幽体離脱なら、戻り方を前に教えたでしょ？」

「ああ。やつてみたけど、拒絶された」

「拒絶？　どう言うこと？」

「俺が知るかよ。まあ、どうせ夢だからどうでもいいけど」

「……この期に及んでまだ認めないつもり？　これは紛れもなく現実よ」

「これが現実だつ」

「しつ、黙つて」

突然俺の言葉を遮る麗華。その直後、誰かが病室の扉を開けた。背を向けているくせによく気が付いたな。

病室に入ってきたのは看護師だった。面会時間が終わりであることを伝えに来たようだが、明らかに俺の姿が見えていないこの人の前で口を噤む必要はなかったように思う。まあ、一人で喋っているもバカみたいだが。

そして、看護師が出て行つた後、麗華はこつ言い残して歸つて行つた。

「とりあえず、ここから出ないように。明日、お母さんを連れて来るから」

この言葉の意味が分からない俺ではない。この状態で麗華の母親と面会することの意味も何となく分かる。

だが、夢であると信じて疑わなかった俺は、どこか他人事のような心境でベッドに横たわっている自分を見下ろしていた。

それから何時間経ったのか。結局、この悪夢から覚めないまま朝を迎えてしまった。

その日差しの眩しさに思わず目を背けたところで、壊れそうな勢いで病室のドアが開け放たれる。

何を考えるでもなくただぼうつとしていた俺は、突然の闖入者に驚いて思わずベッドの下に隠れたが、

「隠れても無駄よ。悪いようにはしないから出て来なさい」

「……」

悪いようにはしない、と言う言葉はどうも信用出来ない。だが、ここで出ていかなければ後が怖いのも事実。

それならば潔く出た方がいいと考えた俺は、ベッドの下から顔だけ覗かせた……つもりだったのだが、次の瞬間物凄い力で引っ張られた。

その得体の知れない力に成す術もなく引きずり出された俺の下に、声の主がゆつくりと近付いてくる。その人物が足を止めたところで、俺は床の中に埋まりかかっていた顔を上げた。

そこに立っていたのは、やはりと言うか当然と言うか、麗華の母親である、新條千影^{ちかげ}さんだ。

いつものように黒い和服に身を包んだ千影さんは、わざとはだけさせた裾から、高校生を子に持つ母とは思えないほどの美脚を覗かせている。

そして、床に這いつくばっているような格好の俺は、そんな彼女を微妙なアングルから見ているわけで……、

「なに凝視してんのよ！ この変態！」

「あら、やきもちかしら？」

「ち、違いわよ、お母さん！」

……相変わらずだな、この母娘は。

おかげで何事もなかったかのように立ち上がることが出来たが、麗華に向きかけた矛先は再び俺に向いたようだ。

細く怪しげな目を更に細めて、挑発するような笑みを浮かべている。

「それにしても傑作だわ。あれだけ存在を否定していたのに、自身^{自身}が霊になつてしまふなんてね。これでもう、信じるしかなかったでしょ？」

「何言つてんすか。俺が信じてるのは、これが夢であると言つただけですよ」

「あんたも頑固ね。なら一つ聞くけど、夢の中では痛みを感じないはずよね？」

「当然ですよ、千影さん。ほら、こうしても痛くないですよ」

そう言いながら自分の頬をつねると、千影さんは呆れた表情になりながら、

「痛覚がないんだから当たり前でしょ。それと、今日は『^{しんじよきんえい}真浄千影』として来たのよ。私の力をとくと見せてあげるわ」

そう言ってから麗華を呼ぶと、これまた露出が激しい豊満な胸元から無色透明の数珠を取り出して左手に掛け、目を閉じて何やらぶつぶつと呟き始めた。

彼女はさつき、「霊能者」としての名を名乗っていた。それに加えてあの数珠と来れば、夢の中とは言えいい気はしない。

麗華は麗華で、心底面倒くさそうな様子で俺に近付いてくる。

情けないことに二人の威圧感に身構えてしまった俺だったが、そんな俺を見た麗華は鼻で笑うと、そのまま通り過ぎてベッドの方へ向かった。

そして、千影さんが目を開けた瞬間、ベッドの上の無防備な俺に

襲いかかる。一体何をする気だ!?

「ちよつと待て!」

「問答無用!」

そう言いながら急に表情を百八十度変えた麗華は、俺の頬を思い切りつねった。

そんなことしても痛いわけが……、

「いだだだだっ!」

「どう? これで認める気になったかしら? これでも認めないなら、次は急所を」

「分かりました! 分かりましたからそれだけは……!」

「あら残念」

分かっていたことだが、この人やつぱりSだ。

ここで認めなければ、冗談抜きで急所責めにあっていたことだろう。

だが、それを実行する役である麗華は、何故か顔を真っ赤にして黙りこくっている。

その様子を見た千影さんは、いたずらを思いついた子どものような表情になりながら麗華の背後に回り、その赤くなった耳元で囁いた。

何を言っているのかは俺には聞き取れないが、この場に医者がいたら検査を勧められそうなくらい赤みを増した顔を見れば何となく想像はつく。

見ようによつてはいかがわしいそのやり取りが終わると、麗華はもじもじしながら横目で俺を見て、部屋の外にまで聞こえてしまいそうな大声で言い放った。

「わ、わた……私、トイレ!」

「……いっといれ」

あまりにもベタなその反応に、思わずダジャレが飛び出す。だが、麗華はそれすらもスルーして、慌てて病室を飛び出した……と思いきや、ドアを少しだけ開けて顔を覗かせ、

「二人きりになったからって、お母さんに変なことしたら成仏させるからね！」

「しねえし、させねえよ！」

「私はかまわないわよ」

「……お母さんのバカ！」

そう言い残し、そろそろ病院側から苦情が来そうな勢いでドアを閉めて走り去った。

その様子を見ながら小さく笑った千影さんだったが、すぐに振り向いて真剣な顔付きになる。そして、ベッドの方へと歩を進めた。

まさか、俺が抵抗出来ないのいいことに……、

「変な想像してるんだったらごめんね。私も弄りたいのは山々なんだけど、今はそれどころじゃないのよ。あの子も追い出したことだし、さっさとやっちゃいましょう」

「べ、別に変な想像なんか……それより、追い出したってどう言うことですか？」

「説明は後よ。今はこっちが先。ちょっと黙っててちょうだい」

その真剣な声に、俺は何も言い返すことが出来なかった。何をする気なのかは分からないが、俺の幽体離脱に関することだろう。ようやく本題と言うわけだ。

そして、再び左手を前に出して目を閉じる千影さん。

俺自身が霊体になっているせいなのかどうかは定かではないが、彼女の霊力らしきものが俺の肉体に働きかけているのが分かる。霊力の流れ、みたいなものなのだろうか。それが、俺の体を包んでいるのが見える。

だが、肉体にも魂にも特に変化は見られない。まだ調べている段階なのだろうか。

それを聞こうかどうか迷っていたところで、千影さんは左手を下げて目を開いた。同時に霊力の流れも消え、俺の体と魂は相変わらず離れたままだ。

その結果に溜息を吐くより先に、隣から盛大な溜息が聞こえた。

そして、数珠を胸元にしまいながら言う。

「やっぱり思ったとおりね」

「何がです？」

「いい？ よく聞きなさい。あんたが元に戻れないのは、『呪い』のせいなの」

「……………は？」

千影さんが放ったその言葉に、理解が追いつかない。「呪い」と言う言葉の意味は知識として頭の中にある。だが、実際にそれがどんなものなのか、経験もなければ体験談を聞いたこともない。

そんな得体の知れないものが、今のこの状況を作り出している元凶だと言われたら、もはや俺には成す術がない。

だが、今は専門家が目の前にいるのだ。ほんの数分前まで心霊の類を完全に否定していたのに何とも情けない話ではあるが、今は頼るしかない。

そう、頼れるのはこの人だけ。だが、当の霊能者は、相変わらず渋い顔付きだ。

そして、ドアの方をちらりと見た千影さんは、続きを話し始めた。「低級の霊がかけた呪いなら、私の力でどうとでも出来るわ。でも、今回の相手は格が違う。たぶん、私が今まで相手をしてきた中でも最強クラスね」

「つまり、呪いは解けないと……？」

「今この場で解くのは、世界中の霊能者を引っ張り出しても無理ねでも方法がないわけじゃないわ。ようするに、本体を叩けばいいのよ」

それはつまり、俺に呪いをかけた霊そのものを浄霊すればいい、と言うことなのだろう。

言うのは簡単だ。だが、千影さんが最強クラスと言うほどの霊をそう簡単に浄霊出来るのだろうか。霊のことはよく分からないが、反撃されたらやばいのでは。

そんな懸念が頭の中を錯綜していた俺に対し、千影さんは一変し

て安堵の表情を見せ、

「やっぱり、あの子を追いついて正解だったわ。今回の件に責任を感じてるみたいだから、このことを知ったら『私がやる』と言い出しかねないし、今のあの子では到底太刀打ち出来ないわ」

「それであんなことを……」

「そう言うこと。だから、悪いけどこのことは……」

「分かりました。黙っておきます」

「ありがとね……それと、もう一つ。あの子を助けてくれてありがとう。そして、ごめんなさい。あんたが間に入らなければ、きっとあの子がこうなっていたはずよ。本当なら、霊能者が一般人を巻き込むなんてことはあつてはいけないことなんだけど、あの子はまだ未熟なの。だから」

「はい、許しますよ。元はと言えば、割って入った俺が軽率だったんです。だから、お相手つてことで」

「……ありがとう。この件は私が必ず決着をつけるから」

「無理しないでくださいね」

「分かったわ……おっと、ちょうど麗華が戻ってきたみたい。じゃあ、この話はここまで」

千影さんがそう言うと、その数秒後に病室の扉が開けられ、相変わらず不機嫌な様子の麗華が戻ってきた。昨日の麗華もそうだが、人が近付いてくるのも霊力で分かるのだろうか。

これからこの姿で過ごすにあたって、もっと霊力について知っておく必要があるそうだ。

そんな俺の心を読んだかのように、千影さんが助け船を出してくれた。

「麗華。しばらく諒と一緒にいなさい。四六時中ね。元に戻すにはもう少し時間が掛かるし、その間に悪霊共に襲われでもしたら大変でしょ。それに、霊力についてももっと知る必要があるそうだし、教えてあげなさい」

「何で私が！」

「私は忙しいのよ。今日だってこれから仕事なんだから。じゃあ、頼んだわよ」

そう言い残し、そそくさと帰ってしまった。

これじゃあ、船は船でも泥船だ。麗華と一緒にいるなんて、魂なのに命がいくつあっても足りそうもない。

当然、そんなことは口が裂けても言えないが、麗華もあからさまに嫌そうな顔をしている。霊体になっているとは言え、男と一つ屋根の下で暮らさなければならいとなれば、年頃の女としてはいい気分はしないはずだ。

だが、麗華は一つ溜息を吐くと、俺をまっすぐ見据えて手を差し出してきた。

「ほら、行くわよ。どうせ、他に行くところもないんでしょ」

そう、麗華の言うとおりだ。どうせ家に帰っても誰もいないし、飯にいたとしても俺の姿は見えない。ならいつそ、俺を人間として迎えてくれる麗華の家にいさせてもらった方がいい。

そう考えた俺は、差し出された手を握り返した。

こうして触れ合うことが出来るのは、きっと麗華の霊力のおかげだろう。その手には、ほのかな温もりさえ感じられる。

そう。霊の存在を認めたこの日。奇しくも、心霊の類を信じなくなつた十年前のあの日以来感じたことのなかった「家族の温もり」を感じたのだ。

（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回はふと思いついたものを書き起こしたただけなので、中途半端ではありますがここまでとさせていただきます。

これをどれほどの人から読んでいただけるのかは分かりませんが、評価次第では連載することもあるかもしれません。

と言うことで、ご意見・ご感想をお待ちしております。

それでは、今回はこの辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4880p/>

ゴーストリー

2010年12月15日21時55分発行